

「イエスも知らないその時？イエスの生き方とは？」

教会の暦は降臨節（アドヴェント）に入ります。アドヴェントは英語ですが、これはラテン語のアドヴェントス「到来する」から来ています。私たちの信仰は「主を待ち望む」ことで

アドヴェントにおいて私たちは2つの到来に心を向けます。一つは主の降誕「クリスマス」、そして主の再臨「神の国の完成」です。再臨の時は誰にも知らされておられません。意外かもしれませんが、「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」（マルコ13：32）とあるように、イエス様ご自身も知らないと言うのです。ここに主ご自身も私たちと同じ人間としてこの地上での生涯を送られた事が表れています。そして主の地上でのご生涯は悩み、苦しみの絶えない日々でありました。

あの十字架の受難の直前、ローマ兵に逮捕される前のゲッセマネでもイエスは神の子でありながら徹底的に私たちと同じ人であられたのです。苦しみを遠ざけてください。しかし、どこまでも父なる神の意志に従おうとする姿が記されています。そして、苦しき、もだえ汗が血の滴るように地面に落ちたとあります。そして、そんな苦しむイエスを天使たちが力づけたのです。

弟子たちはイエスが本当に逮捕されるという実感を持ってませんでした。私たちも再臨を待ち望む信仰を大切にしなければと思いながらも、その実感は正直持てないのではないのでしょうか。そして、繰り返しになりますが、その日は主ご自身も知らないと言うのです。しかし、私たちが心に留めたいことは主イエスが苦しみもだえながらも十字架の道を受け入れていく祈り、つまり私たちのために血の滴る祈りを捧げてくださっている、支えてくださっていることです。そして、人知れず天の使いが私たちを支えてくれているのです。天使も「その日」がいつかは分かりません。

わたしはここでいう天使は私たち一人一人なのではないかと思うのです。人は必ず支えられて生きています。私も本当に支えてもらって生きています。支えてもらっているということには敏感でありたいと思うのです。クリスマス礼拝の案内によく「みんな誘い合ってクリスマス」をお祝いしましょうと私も書きますが、その意味は、いま一度「わたし」は「あなた」という神さまから遣わされた天の使いによって支えられていることに思いをはせることなのではないでしょうか。（司祭 越山哲也）